

# 社会思想史論

——覚え書き——

## 1 はじめに

「社会思想史」とは何か。一見して自明に思われるこの問いは、たとえば哲学思想史・倫理思想史・政治思想史・経済思想史あるいは法思想史などの個別的な思想史との関連で考えてみると、簡単であるどころか逆にきわめて複雑な論点をふくむ困難な問題であることがわかる。だから、たとえば大河内一男氏は、「社会思想史は、今日多くの大学で講ぜられているが、思想史としては必ずしも、まとまりのある明確な領域をもっているわけではなく、その担当者の異なるにつれて異なった社会思想史ができ上る、といった方が事実に近いであろう。だから、哲学者が社会思想史を講ずれば、おのずから哲学史的な社会思想史ができ、政治学者が社会思想史を担当すれば政治思想史の発展を基幹とする社会思想史になるように、筆者のごとく、経済学や社会問題の領域に立ちながら社会思想史に接近しようとするものは、また

おのずから、経済思想史や社会問題の発展史を背景とした社会思想史にかた寄りすぎる結果となることを避け難い<sup>(1)</sup>。」と率直に述べて、社会思想史の領域が明確でないことを指摘しておられる。

また城塚登氏は、『社会思想史』という領域は、まだ学問的に十分に踏み固められていない。それゆえ、ここでその対象や方法について学界の定説を述べるわけにはいかない。」と述べ、しかもさまざまな社会思想史が「社会思想史」と題して描かれているからには、「そこにかなり漠然とではあっても、共通の問題意識や志向や要求が横たわっていることが推測される。ここではまず、このような共通のものを、かなり幅の広い枠のなかでとらえることにしよう。」<sup>(2)</sup>といて、そのあとで社会思想史の対象と方法について論じておられる。

さらに水田洋氏は、「社会思想史という学問は、日本だけでなく国際的にも、かなりわかく、その領域や方法はけっして確立されていない。社会主義思想史でも社会運動史でもなく、社会哲学史でも社会学

野村 博

史でもない。このわかい学問は、なおおくの多面的な模索を可能にしているし、必要としているのである。」と述べておられる。<sup>(3)</sup>

このように、社会思想史の研究の領域・対象・方法は、それぞれ専門の個別的な思想史に対する社会思想史の關係や、一般的な思想史における社会思想史の位置の問題とともに、いわば社会科学における社会学固有の研究対象や領域の問題にも似て、なかなか一義的に決めることが容易ではない。その理由はさまざま挙げることができらうが、とりわけ「社会思想」という概念自体にすでに、ある種の不明確さが包含されていることにまず主要な原因があると考えられるのである。

そもそも「社会思想」とは何か。社会思想史の研究対象や領域・方法などを決めるまえに、まず社会思想の概念を明確に規定することが先決問題であると思われる。この小論で私は、わが国において社会思想史を専攻している人々のきわめて多岐にわたる社会思想の概念規定を眺め、その多様性にもかかわらず共通していると思われる規定因子に目を向けながら、社会思想の概念を構成する必要不可欠の要素を考え、私なりの社会思想(史)論を呈示してみたいと思う。

## 2 広義の社会思想

「社会思想とは、社会主義思想や社会問題思想のことではない。それらは社会思想のなかにふくまれるが、その一部分をなすにすぎない。人間は、生きているかぎり社会のなかにあるのだから、かれが自分の生きかたについて考えるならば、それが社会思想である。」<sup>(5)</sup>これは、さきほども言及した水田洋氏の定義であるが、同氏はまた『社会思想

小史』において、「社会思想とは、かんたんにいえば、社会のなかで生きる人間が、社会についてかんがえることである。」<sup>(6)</sup>と述べ、人間の意識は、人間と自然との対立、人間と人間(または社会)との対立、社会と社会の対立という三段階を経過したが、「この第一の意識にしても、やはり社会的なのだから、社会思想とは、いじょうの三段階のすべてをふくむとも、かんがえられるのだが、社会がはつきりと姿をあらわすのは、第二・第三のばあいであって、人間と自然とのかんけいは、たいていのばあい、人間と人間とのかんけいをつうじて、社会的なえいきょうをあたえる。社会思想とは、このようないみでの、人間のいきかたについての思想である。」<sup>(7)</sup>と説明されている。

本来的に社会的である人間が人間の生き方について考えることが社会思想である、といわれる水田洋氏は、さらに『近代人の形成』のなかで、近代社会の成立期の社会思想を歴史的に分析するまえに、「社会思想ということばのいみについての予備的な検討が必要である。なぜなら、このことばが学問的に使用されるようになったのは、かなりさいきんのことであって、慣習的歴史的に固定したいみを、まだもつにいたらないからである。」<sup>(8)</sup>といい、「……経済についての経済思想、政治についての政治思想があるのとならんで、社会についての社会思想があるのではない。社会とは人間生活の総体であり、それゆえに、社会思想とは、人間の思想そのものだといっても、けっしてたんなる誇張ではない。このいみで、社会思想は、世界観・社会観といいたおす方が、その性格をよく表現することができる。それは、人間の生きかた、世界・社会にたいするかれの態度を、思想としてあらわしたも

のであった。」そして、「社会思想を、社会観Ⅱ世界観として理解していいとすれば、それは、一方では、人間のあらゆる思想活動をつらぬく、一定の生活態度であり、他方では、人間の社会活動Ⅱ生産活動にねぎす、実践的意欲の表現だといふことができる。したがって、社会思想は、包括的であり、実践的であることを、その基本的な性格としているのである。」と論じておられる。

要するに水田洋氏によれば、社会思想は社会的存在である人間が社会的存在としていかに生きるべきかを包括的・実践的に考える思想・態度の表現である、ということになるだろう。だから社会思想は、世界観とか社会観とかいいなおす方がむしろよい、ということにもなるのだろう。このように社会思想を最も広義に解する考え方は、水田洋氏のほかにもいろいろあるが、そのうちのいくつかを眺めてみよう。

まず淡野安太郎氏は、『社会思想史』のなかで、社会思想を端的に「社会形成の努力の自覚的表現」と規定して、「社会思想の歴史こそは、本来社会的存在である人間の真面目を遺憾なく示すもの」と述べておられる。<sup>(9)</sup>

また、「社会思想を、文字どおりに、社会の思想とか社会に関する思想とかいいかえてみても、その実体はわからない。その社会なり思想なりの一語一語が、たやすく理解されるものではないからである。」と書きはじめられた『社会思想史』の著者出口勇蔵氏は、かず多く刊行されている社会思想関係の書物のうち社会思想を組織だてて論じたものはほとんどまったくなく、大部分が社会思想史であることを指摘され、その理由は「社会思想というのは、その理論的展開はむづかしい

が、その歴史的記述はやさしい」からだろうと語り、思想と科学の差異および社会思想と社会科学の差異を述べたあとで、「社会思想について、つぎのようなもっとも簡単な定義を一応くだして」おられる。

すなわち、「社会思想とは、人間の社会的実践によってつくられる社会的表現と、その表現をめぐっての人間相互の関係とのなかにあって、人間が自分らの社会生活について全人格的に行なう思考の成果である。」<sup>(10)</sup>「簡単にいえば、人間が社会生活について全人格的に行なう思考の成果、それが出口勇蔵氏による社会思想の定義である。

高島・水田・平田三氏共著『社会思想史概論』によれば、「いったい社会思想とはなんであろうか。人間は生きようとするかぎり思想をもっている。しかし単に生きんとする意欲や情感だけではまだまだ思想でない。直接的な意欲や情感が思想にまで高められるためには、それがただ自分だけのものでなく、他人にも通用するものでなければならぬし、また単に通用するというだけでなく、それを実現するように人を行動にまでおし進めるものでなければならぬ。ところで人間は生まれながらに社会の中に生きている。だから社会思想とは、人間が社会の中で生き行動することにより、あるいはそのことのために、もたなければならぬ態度決定であるといふことができる。なんのための態度決定なのか。それは社会における人間の生活をよりよくするという目的のためである。したがって社会思想とは、人間の社会的解放の思想であるといわなければならない。」<sup>(11)</sup>そして人間は、社会の中のみならず歴史の中に生きているのであるから、「社会における人間解放の思想としての社会思想は、時代が進むにつれ、また民族が異

なるにつれて歴史的に変化する。」だからルネサンスからロシア革命にいたるまでの本書で取り扱う社会思想史は、まず人間解放の思想として、次に民族解放の思想として、そして最後に階級解放の思想として現われていると考えられる、と述べられている。つまり社会思想とは、本書によれば、人間が社会の中で生き行動するためにもたなければならない態度決定として、人間の社会的解放の思想である、と主張されているのである。

これとほぼ似た趣旨のことを『社会思想の名著一二選』の編者荒川幾男氏は、その「はしがき」のなかで、「社会思想という概念の定義は、今日必ずしも明確でなく、したがって、社会思想史の成立根拠もおお論争的であるが、<sup>(43)</sup>」といいながら、すぐ言葉をつづけて、「本書は、あらゆる意味での思想の根底にあって、人間が自己と世界に対してとる態度決定の基盤となる社会イメージ<sup>(44)</sup>」社会認識を社会思想としてとらえ、この意味で変革期の課題に挑戦した社会思想の古典を知的冒険の事例として選んである。」と書いておられる。

以上で私は、世界観<sup>(45)</sup>社会観としての社会思想、社会形成の努力の自覚的表現としての社会思想、社会生活についての人間の全人格的な思考の成果としての社会思想、社会における人間の態度決定としての社会的解放の思想であるとする社会思想、社会に対する人間の態度決定の基盤となる社会認識としての社会思想、というように、社会思想をもって、人間が社会に対していかなる態度をとって生きるべきかを決定する根本的な思考の表現であるとする広義の解釈を眺めてきた。

次に、広義ではあっても上述のものとはやや趣きの異なった定義を

みていくと、社会思想とは「社会組織ないし体制に関し、それを生み出したまたは多数者の信念となつてそれを支えている体系的思想<sup>(46)</sup>」であるとする関嘉彦氏の定義や、「社会思想ということばは、現在多義に用いられていて、ひとにより意味を異にしているが、これを社会秩序の根本理念または理想的社会秩序に関する体系的思想と解するときも<sup>(47)</sup>」ともひろい妥当性をもつことができるようにおもわれる。」という木村健康氏の考えがある。また新明正道氏によれば、「社会思想は一定の理想的な社会的目的をもち、これに合致した社会組織の実現を促進しようとする思想であり、その成立する根底には、あらかじめこれを必然とする社会的事情が先行している。社会思想は、社会の組織が安定しその基礎が確固たるかぎり発生するものではない。……社会思想は、社会の危機的な状況の所産とみるべきものであって、それ自身この状況において成立した実践的な欲求、あるいは運動の精神的反映を意味している。」つまり社会思想とは、新明氏によれば、「一定の社会組織を理想的な目標として選択し、その実現をはかろうとする思想」であるから、「第一義的に社会思想の名に値いするものは、……社会改造を意図する思想である」が、しかし「広義において社会思想は、……既存の秩序を理想化しその維持をはかろうとする反対の思想をも包含する」ことになる<sup>(48)</sup>と述べられている。

### 3 狭義の社会思想

ここらで眼を転じて社会思想の広義から狭義の定義へ移っていこう。狭義のなかにも広狭さまざまの考え方がみられるが、比較的広い見

解から眺めていくことにすると、まず「社会思想は、改造の思想でなければならぬ。……改造思想としての社会思想は、価値体系として、個人の行動と態度とを規制する原理である。」と主張される住谷悦治氏の見解がある。

また本田喜代治氏によれば、社会思想は社会変革の実践的立場に立つものとして社会問題を予想する社会批判であり、社会の現状について変革を求める被圧迫者と維持を願う支配層の間の階級対立的モメントが含まれているが、「厳密な意味での社会思想は社会、<sup>(4)</sup>というものが発見されてからでなくては成立し得ない」から、「……近代社会を逆に変革しようとして批判する思想、これこそがわれわれの対象とする社会思想である。」と論じられて、中世以前は「社会思想史の<sup>(5)</sup>前史」として簡単に触れるのがよいと主張される。

さらにまた、「いわゆる哲学と実践との橋渡しをする一貫的な思想体系」「哲学的基礎を有ししかも実践の指針となるべき思想体系」の研究のために創られたという社会思想研究会は、『社会思想史十講』を出すにあたって、「……編纂上の困難はさらに重要な問題から発している。すなわち『社会思想』また『社会思想史』という語に伴う曖昧さである。わが国で出版されている『社会思想』また『社会思想史』という標題をかかげた著書あるいは翻訳書は、その内容からすると社会主義思想ないしその発達史か、さもなくば社会哲学あるいはその歴史かの、いずれかを扱ったものである。」と述べたあとで、「われわれとしては、『社会思想』という語を大体において、社会改革を目的とする思想の体系の意味に解している。たとえば自由主義、社会

主義、共産主義、ファシズム等は、単に哲学を示すだけでないことは勿論、またいわゆる社会哲学という表現をもってしても包摂しえない概念であると思う。そこでわれわれとしては、これらの諸主義を表現するために『社会思想』という語を使用せざるを得ないのである。」

このあと言葉をさらにつづけて、「ところが『社会思想史』という場合になると、なお問題が複雑になってくる。というのは、あの古代から現代に至るまでの『社会哲学』の歴史を書いたルドヴィッヒ・シュタインが述べたごとく、ルネサンス以前の、つまり『社会』の成立していない時代においては『社会哲学』も成立しない。このことは『社会思想』についても同じことが言えるだろう。したがって古代から現代に至るまでの社会思想史を編むとすると、叙述に関して一貫性が欠けてくることもまたやむをえない。その他、現代の思想においても、社会改革への十分な意図をいだきながら、一個の体系として完成されていないものもあるので、社会思想史の編纂の困難は、かかる意味からも甚だしく加重するのである。」と述べている。<sup>(6)</sup>

猪木正道氏は、社会思想という言葉を社会問題と関連させて考えたといってから、「社会問題とは、資本主義の成立と同時に生まれた資本家階級と労働者階級との対立・抗争に関する問題であり、「もつと端的にいえば、社会問題とは労働問題だということ」になるから、この社会問題を前にして解決しようとして生まれたのが社会思想であると述べ、「社会思想は社会問題との対決を内容に」していると解釈しておられる。しかも、「そもそも社会思想が対象とする社会問題は、社会的不平等の問題にほかならない」から、「あらゆる社会思想

は、何らかの意味において、社会的平等を目指すもの」といえると述べておられる。<sup>(80)</sup>

中瀬寿一氏は、その『社会思想史』のなかで、「社会思想史を内容的に、支配者の思想や右翼の思想、反動の思想をもふくめてひろくとらえることもできるであろう。だが、ここでは一般の定説のごとく、社会思想史を被支配の思想、反体制の思想、民衆の進歩的な抵抗思想の苦難にみちた一歩々前進の歴史として、とくに資本主義の形成・発展の過程からあらわれた改良と変革の思想として、ごく狭義にとらえることにしたい。」と述べておられる。したがって中瀬氏によれば、社会思想とは被支配・反体制・民衆の進歩的な抵抗思想であり、資本主義に対する改良・変革の思想ということになる。

福武・日高・高橋三氏共編『社会学辞典』の「社会思想」（大河内一男氏執筆）によると、「……社会がそれぞれの経済的利害の対立する諸階級に分裂しているかぎり、ある時代の社会思想は、これら相対立する諸階級の現実的・物質的利害の主張やそれにもとづく政治的要請の中から生まれる。……したがって社会思想とは、常に相対立する物質的利害に根ざす諸階級間の闘争の理論的表現として互いに相争う形で登場するものであるが、その過程で経済的・政治的優位を確立した支配階級の利害を代表する思想やものの考え方が、その時代の支配的社会思想として形成され公認されるのである。それは支配的な経済的諸関係の観念的表現にほかならない。」<sup>(81)</sup>もとよりこの支配的社会思想は、支配階級が歴史的任務を終わり、次第に腐朽しはじめると、批判的精神と科学的客観性を喪失して単に現状弁護論に墮し、これと対立

する被支配階級の革命的思想に対する防衛と抑圧の道具になる。「これに對して被支配階級は、……旧思想の批判的継承の上に社会の現状批判と変革を主張する新しい社会思想を発展させる。このようにして社会の矛盾が深化し階級闘争が激化している時代は、社会思想の偉大な創造的激動の時期である。」と説明されている。

小泉信三氏の『社会思想史研究』<sup>(82)</sup>は、社会思想(史)について特に何らの概念規定は示されていないが、社会思想(史)をもって社会主義思想(史)と解釈しておられることは目次と内容を一見しただけでも明らかである。小泉氏のほかにも、平井新氏や井伊玄太郎氏なども、社会思想により社会主義思想を指しておられることは明白である。

以上、狭義における社会思想の定義を眺めてきたが、ここで要約してみると、狭義のなかでも比較的に広い解釈、すなわち社会思想をもつて改造思想、社会改革の立場に立つ社会批判、社会改革を目的とする思想の体系とする解釈から、社会問題との対決を内容にした社会的平等を意図する思想、被支配・反対制の抵抗思想、諸階級間の闘争の理論的表現、さらには社会主義思想のみを意味するという狭い解釈まで、かなり色あいの異なった考え方がみられるのである。

#### 4 社会思想の構成要素

広・狭二義における社会思想の定義をみてきた私は今ここで、くどいようだが再び要点を繰り返しておくと、広義においては、社会思想とは社会観・世界観、社会生活についての人間の全人格的思考の成果、社会に対する人間の態度決定の基盤をなす社会認識、さらには社会の

組織・体制の根幹になっている体系的思想、社会秩序の根本理念、理想的な社会組織の実現をはかる思想ということになる。狭義においては、社会改造の思想、近代社会を変革する思想、社会改革を目的とする思想、社会的平等を旨とする思想、被支配・反体制の抵抗思想、階級闘争の理論的表現、さらには社会主義思想を意味することになる。

大塚金之助氏編『岩波小辞典社会思想』の「社会思想」の項目をみると、「広義には人類が一定時期のあらゆる社会現象に対してもつ社会的意識・社会的理想の総合的な思想潮流。狭義には性・人種・民族・階級・信仰・思想等の相違を理由とする抑圧から人間を解放しようとする思想。……それはそれぞれの時期の社会的・政治的・経済的諸条件、それぞれの国の歴史的発展に対応し、ヒューマニズムによって基礎づけられ、諸種の自由を求める思想、ひいては社会体制の変革をめざす思想として形成される。」と説明されている。

この説明は、上で眺めてきた広・狭二義のさまさまの定義を要約的にいいあらわして、妥当であるといえよう。つまり社会思想は、従来さまざまの人々がいろいろな言いかたで規定してきたけれど、簡単にいってしまえば（過度の単純化に伴う誤解をおそれずにいえば）、広義においては人間が社会に対していく社会的な意識であり、狭義においてはさまさまの抑圧から人間を解放するための社会改革の思想である、といつてさしつかえないであろう。

ところで広義の社会思想は、文字どおりその意義が広くて漠然としているけれども、しかし人間が社会に対していく社会的意識は、所詮みずからのうちに社会的理想を包含し、したがって何らかの社会的

変革を旨とするものでなければならない。というのは、社会的意識は「現にある社会」と「あるべき社会」とのギャップから生まれてくるからである。とすれば、逆説的に聞こえるかも知れないが、広義の社会思想は当然に狭義の社会思想のなかに包摂されなければならない。かくて社会思想には、私見によれば、「現にある社会」を「あるべき社会」の観点から批判し改革するという理想が必要不可欠の要素として含まれていなければならないのである。

すでに一九二五年、「すべての社会思想には、一方において現実の社会生活の認識があり、他方において社会生活の理念或は理想があり、この両者が社会生活の理念を現実化せんとする意欲によって連結されてをる。」と波多野鼎氏は『社会思想史』の冒頭で述べておられる。また河合栄治郎氏は、『社会政策原理』（一九三二年）において、「社会思想とは現存社会秩序に対する対策を指示する思想を云ふ。」と端的に述べ、さらに『社会思想家評伝』（一九三六年）のなかでは、「社会思想は、当面の社会秩序に対する批判と、次に来たるべき社会の指示とから成る。」と喝破しておられる。つづいて河合氏は、「而して、この批判と指示とは、当然に理想社会の概念を前提とし、これこそ社会哲学の領域に属するがゆえに、社会思想は必然に哲学に接続する。」と述べられている。

さきに2および3で眺めてきた広・狭二義にわたる諸説や、波多野・河合両氏の見解をも踏まえて、とりあえず私は社会思想の定義を次のようにくじしたい。すなわち、社会思想とは、それぞれの時・所における「現にある社会」を科学的に分析し、「あるべき社会」の観点

から批判して、「あるべき社会」にいたる手だてを示した体系的な思想である、と。

『近代社会思想史』で穂積文雄氏は、「現実の社会に対する不満より生まれる」社会思想は、「理想の社会を追求するところになりたつ思想」として、(1) 現実の社会に存する欠陥の認識、(2) 現実の社会をこえた理想の社会のビジョン、(3) (1)と(2)をつなぐかけはし、いいかえれば、そのビジョン実現の道」の三つの要素から成り立っていると指摘しておられる。伊達功氏の「トマス・モアの『ユートピア』の分析」である『近代社会思想の源流』も、このような穂積氏の社会思想論の線上に立って書かれた労作であつて、『ユートピア』は理想描写と現実批判の国家小説であるが、「理想と現実とを結ぶかけ橋、すなわち理想実現の手段を一般に欠除している」一点に空想的と呼ばれるユートピア思想の致命的な欠陥があることを示しておられる。

さきにも言及した関嘉彦氏は、『社会思想史』のなかで社会思想史の学問的研究の意味を問いつつながら、あるべき社会思想とはいかなる内容から構成されているべきか、あるべき社会思想の構成要素を三つ指摘しておられる。すなわち、あるべき社会思想は、理想社会についての観念、現存社会制度の分析、社会悪を除去する社会的技術ないし政略——いいかえれば、「現実を批判する原理としての理想社会のイメージ、社会悪と社会制度の関連を説明する現存社会の分析、及び現実の社会を理想の社会に転化させる実現方法」の三つを構成要素として具備していなければならない。もっとも、関氏によれば、従来のすべての社会思想がこの三つの要素を意識的に区別してもつていたとは

かぎらないが、しかし多くの偉大な社会思想は、無意識的にしろまたは不完全であるにしろ、この三つの構成要素をもつていたといえよう、と付言しておられる。

私見としてさきに示した社会思想の定義は、いみじくも穂積・関両氏が述べられている社会思想の構成要素を含み、しかもそれを明示したものととして、包括的で簡明な定義であるといえないだろうか。2、3で眺めてきた諸説紛紛ともいえる広・狭二義にわたるさまざまな社会思想の定義も、言葉こそ異なつてはいても、意識的にせよ無意識的にせよ、また確言されているにせよいないにせよ、所詮は理想的な社会像のもとに現存社会を分析し批判し革新する原理としての歴史的な使命をもつて表現されたものが社会思想である、ということを含んでいるというのは言いすぎになるであろうか。それはともかくとして、思うに社会思想は、それが社会思想と称されるかぎり、理想社会像、現存社会の分析批判、理想実現の方途という要素をもつていなければならないのである。

したがって社会思想は、理想社会像を設定する社会哲学と、現存社会の経験的・法則的・客観的認識である社会科学との統合された実践的な体系的思想(個々の断片的な観念ではなくて)でなければならぬ。社会に対する科学的な事実認識と規範的・当為的な価値判断とは、厳に区別されなければならないが、「現にある社会」の分析だけでは社会思想ではなく、また「あるべき社会」像の呈示だけでも社会思想とはいえない。「現にある社会」の分析としての事実認識が、その認識の視点・観点として「あるべき社会」についての価値判断と不可分



の一体となって統合されて成立した思想こそ、社会思想の名で呼ばれてきたものである。河合榮治郎氏のいわれた「当面の社会秩序に対する批判」と「次に來たるべき社会の指示」とから成るものとしての社会思想は、このようにして、社会科学と社会哲学との結合した実践的な体系的思想にほかならない。

このことに関連して、すでに言及した出口勇藏氏は、社会思想を社会科学と対比してその差異を「社会科学は社会現象の部分領域にたいする体系的な知識であるにたいして、社会思想は社会現象一般にたいする総括的な知識である。」<sup>83</sup>といわれ、「社会思想と社会科学との中間的な知的産物」<sup>84</sup>として経済思想・政治思想・道德思想等々が存在すると述べておられる。また水田洋氏も、社会思想と社会科学を対比させて、「社会科学は、社会の機構を全体としてとらえなければならないが、社会思想は、そういう社会はあくが可能でないときにも、なりたちうる。これと、みっせつにかんれんして、第二に、社会科学が、社会の機構を客観的に分析するのにたいし、社会思想は、社会のなかでの人間の主体的ないきかたから、出発する。客観的、体系的、理論的にたいして、主体的、断片的、直観的であると、いえよう。」<sup>85</sup>と書いておられる。出口氏が社会思想を「人間が社会生活について全人格的に行なう思考の成果」としておられるのに対し、水田氏が「社会のなかで生きる人間が社会について考えること」としておられるのに応じて、両者の社会思想と社会科学の相違についての考え方も、いささか異なってきたであろう。が、それはともかくとして、両氏がともに社会科学と対比して述べておられるものが社会哲学ではなく社会思想であ

るということについて、私は少し疑問に思う。もともと両氏ともに、「社会思想史」の著書のなかであるから、社会思想と社会科学の差異を論じられたといえるかも知れないが、私見によれば、社会科学に対比させるべきものは社会思想よりもむしろ社会哲学でなければならぬのである。というのは、すでに述べたように、社会思想は、社会科学と社会哲学の統合的な所産でなければならないからである。

以上私は、社会思想とは、それぞれの時・所における「現にある社会」を科学的に分析し、「あるべき社会」の観点から批判して、「あるべき社会」にいたる手だてを示した体系的な思想であり、したがって、理想社会像、現存社会の分析批判、理想実現の方途という三つの構成要素をもっているものとして、社会哲学と社会科学の統合された実践的な体系思想である、ということを明らかにしてきた。それでは、「社会思想史」とは何か。これが次に究明されなければならない問題である。

## 5 社会思想史の対象

1 において私は、社会思想史の研究領域や対象は、社会思想という概念自体に不明確さが含まれているために一義的に決めることがむずかしいのであるから、まず社会思想の概念を明確にすることが先決問題であるとして、今まで社会思想の定義について考察してきた。そして一応明確な定義に達したのである。したがって、当然ここで社会思想史の領域や対象などは明らかにしてこなければならぬはずである。ところが、事実はずしもそうとはいえない。というのは、社会思

想史によって、社会思想——さきに私が規定した意味であろうとも、その他の意味であろうとも——の歴史であると一義的に考えないような社会思想史の解釈も存在するからである。つまり、社会思想史は社会思想プラス歴史として社会思想の歴史である、と一見して必ずしも考えていない解釈がある。この解釈にも諸説がみられるが、まずそのうちの主要なもののみを眺めてみよう。

「社会思想史と言うよりは、社会史的思想史とでも名付けた方が筆者の気持ちに適った題名である。」と『社会思想史』の「まえがき」でいわれる大河内一男氏は、「社会思想史は、単なる思想の歴史ではなく、それぞれの時代の社会思想をその現実的基盤から理解することによってのみその真の意義がはじめて明らかにになる。社会思想の系譜をたどることは、それ自体重要なことに違いないが、なぜ社会思想の系譜がそのようなものとして生じたかは、その現実的基盤を知ることなしには、理解することはできないだろう。本書は、そうした考え方に

立って、社会思想の歴史を、それぞれの時代の現実の政治や経済や社会運動の実態とその推移から説明することに努力した。従って、本書は、社会思想史であるとともにまた社会的思想史だともいえるだろう。……また社会思想史は、それぞれの分野の個々の思想史、例えば哲学思想史、政治思想史、経済思想史、社会主義思想史などをひもと

く前に、それら総体をふくむ序論的な思想史として読んでもらうことを筆者としては希望している。本書が、それぞれの専門の思想史を讀もうとするひとびとにとって、予備的な頭の地ならしに役立つなら幸いである。」と述べておられる。大河内氏にとって社会思想史は、社

会史的思想史であり社会的思想史であり、個別的専門思想史に対する序論的思想史であるということになる。

本田喜代治氏は、『社会思想史——あるいは思想の社会史——』の「序文」で、「わたくしの社会思想史は、この本の副題にもあるとおり、それは、同時に、思想の社会史であり、厳密に言えば、なお、社会の思想史でもある。……社会の思想史というのは思想の面から見た社会史のことである。……だから、社会の思想史は思想の社会史と別のものではない。そして、このように思想の面から社会史をとらえる場合に、その思想の内容を、社会思想、すなわち当該社会ないし一般に人間社会に関して人々がどう考えたかという点に集約して、これを観察し、分析するならば、それが、とりまなおさず、わたくしの社会思想史である。」思想の面からみた社会史としての社会の思想史が、本田氏の社会思想史である。

同じく思想の社会史といっても、『近代思想の社会史』『現代思想の社会史』および『戦後思想の社会史』の三部の姉妹篇を出された宮島肇氏は、「人間の思想は、われわれが社会生活を営むに当たってぶつつかるところの諸問題を解決するための知的手段の組織として、もともその時代と社会との要求からつき動かされて生まれてくるものであるから、したがって「その時代のその社会の政治経済的な仕組みや人間の生活仕方を離れては、思想というものは宙に浮いて無意味なものになってしまう。」という基本的態度に貫かれているものを、思想の社会史の立場と称しておられる。したがって宮島氏によれば、「哲学は政治から眼をはなすな、思想史は、ためらわずに、政治経

済史を食いつくせ、」というのが、「一つの大事な思想史的教訓」であるとしておられる。<sup>40</sup>

また城塚登氏は、『社会思想史入門』で思想史と社会思想史の関係について述べ、「それぞれの個別的な思想史は、人間活動の全領域を包括する一般的な思想史を、つねに前提として予想しなければならぬ」が、社会思想史はこのような一般的な思想史への要求に答えようとするものではあるけれども、社会思想史がただちにそのまま一般的な思想史であるわけではない。社会思想史は、「一般的な思想史がもつ危険——抛りどころを失って茫漠としたものに墮する危険——をさけるために、歴史的な社会の構造連関を手がかりにして、人間の思想活動一般へと接近しようとするものであり、その点では社会思想史は、個別的な思想史と一般的な思想史との中間に位置し、両者の媒介の役を演ずべきものである。」したがって「社会思想史は、社会のなかに生きつつある人間の自己了解および態度決定を示す思想を、社会的な構造連関のなかでとらえ、人間の思想的活動の全領域を包括する一般的な思想史へと接近し、各個別的な思想史の基礎的前提たらしとするものであるといえよう。」<sup>41</sup>と論じておられる。城塚氏にとって社会思想史は、個別的な専門の思想史と一般的な思想史との中間媒介的な思想史ということになる。

さらにまた奥田八二・徳本正彦両氏共著の『近代思想史』の「序章」で奥田氏は、「社会思想史は、それぞれの専門領域の思想や学説をふくみながらも、それらをこえ、それらを総合した、より高次の社会的実践課題の大綱をしめす思想領域をとりあつかう、つまり人類の

社会そのものを大綱的に問題とする思想の歴史だと考えてよい。このような内容をもつ思想は、市民階級が抬頭して以後、すなわち、近代史のなかで形成されたとみられる。……本書に近代の名を冠するのは、そのためである。」と述べておられるが、この意味における社会思想史は、人類社会を大綱的に問題とすることができるとする思想の歴史として、近代思想史ということになるのである。

以上において私は、社会思想史をいわば單純に社会思想の歴史とはせずに、社会史的思想史ないし社会的思想史として各個別の思想史に対する序論的思想史とする大河内氏、思想の面からみた社会史としての社会の思想史とする本田氏、政治経済と思想の関連性を重視する立場を思想の社会史とする宮島氏、一般的な思想史と個別的な思想史との中間的媒介とする城塚氏、そして最後に、人類社会を大綱的に問題とする思想の歴史としての近代思想史とする奥田氏、などの見解を眺めてきた。これらの見解は、社会思想史をもって社会思想の歴史とはせずに、あるいは社会(史)的思想史であったり、思想の社会史であったり、近代思想史であったりする。しかし、それらの名称は、社会思想史が社会思想の歴史を取り扱うという研究の対象に対して異論を提出しているのではなく、むしろ社会思想史の研究方法についてそれぞれ独自の主張をしているものと考えられるのである。つまり、研究の対象ではなく方法の相違を社会思想史という名称よりほかの名称で表現しようとしたものと考えてよいのではなからうか。

とすれば、研究方法はしばらくおくとして、研究の対象に視点をおくかがざり社会思想史とは何かという問題は、社会思想の概念が明確に

されている以上、やはりもはや明らかだといわなければならない。すなわち、社会思想は、それぞれの時・所における「現にある社会」を科学的に分析し、「あるべき社会」の観点から批判して、「あるべき社会」にいたる手だてを示した体系的思想であるから、したがって社会思想は、もともと歴史的な社会的現実に対決する思想である以上、どのような社会思想も必ずその時代のその社会の特定の問題を解決するため生まれてきたものとして、時代がすすむにつれ社会が異なるにつれて、必然的に歴史的に変化する。それが社会思想の歴史にほかならない。いかえれば社会思想史とは、それぞれの時代・社会において理想的社会像のもとに現存社会を分析し批判し革新する原理と方法が示されてきた跡である。社会思想史の研究対象は、ここに明らかであろう。

## 6 社会思想史の方法

それでは、社会思想史にどのような方法でアプローチすべきであろうか。

高島・水田・平田三氏共著の『社会思想史概論』には、社会思想史の諸類型ないし諸傾向として「さまざまな接近方法」が分類整理してまとめられている。<sup>44)</sup>すなわち、社会的現実の側から接近するもの、個別科学史から社会の総体把握へ接近するもの、哲学的世界観的な側面から接近するもの、思想家の体系の歴史への批判から接近するもの、の四つに大別されている。そして、本書で採用された方法は、第二の接近方法にもっとも近いものとして、「経済学・政治学・社会学などの社会生活の実質内容を扱う個別科学の研究成果をふまえながら、し

かも社会の総体把握ができるような見方を打出そうとするもの」で、「このような意味での社会の総体把握という立場から書かれた思想史が、もともと社会思想史の名に値いするものとわれわれは考える」と述べられている。実際、深みのある社会思想を確立するためには、社会の総体的な把握を可能にするような社会思想史へのアプローチがなされなければならないことはいうまでもない。

しかし社会思想史は、社会の総体把握といっても、それが社会史ではなく思想史であるかぎり、単に資料にもとづく一般的な歴史叙述ではありえない。しかもまた、社会思想史は、歴史的な文脈に関係のないいわゆる思想論でないことも当然である。丸山真男氏が『思想史の考え方について』のなかで述べておられるように、思想史は思想論と事実史の中間に位置するものと考えられることもできるだろう。<sup>45)</sup>思想史の研究は、思想の単なる創造ではなく、研究するものが歴史によって拘束されながらも歴史的对象に能動的に働きかけることによって過去の思想を再現することで行なければならない。

したがって、社会思想の歴史としての社会思想史の研究は、まさしく歴史的な研究である。この場合歴史とは、E・H・カーが『歴史とは何か』で語っているように、きわめて常識的な歴史観である「確かめられた事実の集成から成る」歴史的事実としての歴史ではなく、また無数の事象のなかから歴史家が選択した主観的産物としての歴史でもありえない。「歴史とは、歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である。」<sup>46)</sup>すなわち、歴史は現在と過去との対話である。E・H・カーの本書を訳さ

れた清水幾太郎氏が述べておられるように、「一方、過去は、過去のゆえに問題となるのではなく、私たちが生きる現在にとつての意味のゆえに問題になるのである、他方、現在というものの意味は、孤立した現在においてでなく、過去との関係を通じて明らかになるものである。したがって、時々刻々、現在が未来に食い込むにつれて、過去はその姿を新しくし、その意味を変じて行く。」逆にいえば、「過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に掴めないであろう。」<sup>(48)</sup>かつて三木清氏が『歴史哲学』において、「歴史が書き更へられる条件は同時に歴史が書かれる条件である。」<sup>(49)</sup>と云って、「歴史はつねに唯現在の時間のパースペクティヴからしてのみ書かれることが出来る。」<sup>(50)</sup>と主張されたのも、歴史を現在と過去との不断の対話と考えるE・H・カーと見解を同じくするものと思われるのである。

このような意味における歴史的な立場に立って、社会思想史へのアプローチはなされなければならない。かず多くの人々が次々と世に出してこられた「社会思想史」の労作も、所詮は現在を視点として過去との対話のなかから未来を創造しようとするための営為にはかならないのである。

以上において私は、社会思想の概念規定をはじめとして、社会思想史の対象と方法について、諸説を参照しながら私見を述べてきたが、しかし、丸山真男氏がいみじくも語っておられるように、「実際に思想史のうっそうとした森の中にわけ入り、対象と取り組んでいく過程の中でいろいろな問題と当面していつて、その中から思想史の方法というものが考えられていくのであって、水に飛び込まない先に、どれ

が一番いい泳ぎ方であるかということ論ずることは、この分野ではとりわけ賢明でない<sup>(51)</sup>」と思われるのであって、今後の研究により、社会思想史の方法をいっそう綿密に究明していくことが必要なのである。

# 〈注〉

- (1) 大河内一男『社会思想史』（改訂版）有斐閣、1964、pp. 3～4
- (2) 城塚登（編）『社会思想史入門』有斐閣、1965、pp. 1～2
- (3) 水田洋（編）『社会思想史』有斐閣、1968、「まえがき」
- (4) わが国における社会思想史の専攻者といっても、今この場合は第二次世界大戦終了後の現在に限る。戦前（明治・大正・昭和初期）と戦後での「社会思想（史）」の用語法についての相違や変遷については、別に論を必要とする。

- (5) 水田洋（編）前掲書、p. 1
- (6) 水田洋『社会思想小史』（新版）ミネルヴァ書房、1968、p. 15
- (7) 水田洋：同右 pp. 24～25
- (8) 水田洋『近代人の形成——近代社会観成立史——』東京大学出版会、1954、pp. 2～3
- (9) 淡野安太郎『社会思想史（新版）』勁草書房、1964、p. 17
- (10) 出口勇蔵『社会思想史』筑摩書房、経済学全集2、1967、p. 3
- (11) 出口勇蔵：同右、p. 27
- (12) 高島・水田・平田『社会思想史概論』岩波書店、1962、pp. 10～11
- (13) 荒川幾男（編）『社会思想の名著12選』学陽書房、1972、「はじめに」p. 2
- (14) 関嘉彦『社会思想史十講』有信堂、1970、p. 3
- (15) 木村健康（編）『社会思想読本』東洋経済新報社、1958、「序」i
- (16) 新明正道（編）『新版社会思想史辞典』創元社、1961、p. 3
- (17) 住谷悦治『社会思想史』ミネルヴァ書房、1958、pp. 4～5
- (18) 本田喜代治『社会思想史——あるいは思想の社会史——』培風館、1951、pp. 2～7

- (19) 社会思想研究会編『(増訂)社会思想史十講』社会思想社、1967、「編者のことば」
- (20) 猪木正道『社会思想史入門』清水弘文堂、1969, pp. 6~9
- (21) 中瀬寿一『社会思想史』仏教大学通信教育部、1971, p. 3
- (22) 福武・日高・高橋編『社会学辞典』有斐閣、1958, p. 351
- (23) 小泉信三『社会思想史研究』和木書店、1947
- (24) 大塚金之助編『岩波小辞典社会思想』(第2版) 岩波書店、1965, pp. 69~70
- (25) 波多野鼎『社会思想史』更生閣、1925, p. 3
- (26) 河合栄治郎『社会政策原理』日本評論社、1931, p. 313
- (27) 河合栄治郎『社会思想家評伝』日本評論社、1936, p. 3 (社会思想社、1973, p. 8)
- (28) 穂積文雄『近代社会思想史』ミネルヴァ書房、1965, p. 19
- (29) 穂積文雄：同右、p. 16
- (30) 穂積文雄：同右、p. 26
- (31) 伊達功『近代社会思想の源流』ミネルヴァ書房、1970, (増補版 1970) p. 2
- (32) 関嘉彦『社会思想史』(みすず書房刊『社会科学入門』(1956)に所収の論文) pp. 69~74
- (33) 出口勇蔵：前掲書、p. 21
- (34) 同右 p. 22
- (35) 水田洋：前掲書『社会思想小史』pp. 27~28
- (36) 大河内一男：前掲書『社会思想史』(改訂版) p. 3
- (37) 同右 pp. 1~2
- (38) 本田喜代治：前掲書『社会思想史——あるいは思想の社会史——』p. 1~11
- (39) 宮島肇『現代思想の社会史』法律文化社、1966, p. 4
- (40) 宮島肇：同右 p. 4 および『戦後思想の社会史』1968, p. 123
- (41) 宮島肇：同右 p. 42
- (42) 城塚登(編)：前掲書『社会思想史入門』pp. 4~5
- (43) 奥田八二・徳本正彦『近代思想史』(改訂版) 法律文化社、1973, p. 4
- (44) 高島・水田・平田共著：前掲書『社会思想史概論』pp. 4~5
- (45) 同右 p. 10
- (46) 丸山真男『思想史の考え方について』(武田清子編『思想史の方法と対象』創文社、1961, 所収) pp. 22~23
- (47) E・H・カー『歴史とは何か』(清水幾太郎訳) 岩波新書、1962, p. 40
- (48) 同右 pp. iii~iv
- (49) 三木清『歴史哲学』岩波書店 1967, (三木清全集 第六卷) p. 13
- (50) 同右 p. 17
- (51) 丸山真男：前掲書 p. 5